粒子系の古典論ノート

xiupos

2024年8月22日

粒子系*1の古典論の基本事項を体系的にまとめる.

0.1 最小作用の原理

粒子系の古典論において,以下を原理として認める.

時間 t に依存する一般化座標と呼ばれるパラメータ $q^1(t),\ldots,q^D(t)$ に対して、作用 action と呼ばれる汎関数 $S[q^i]$ が存在し a 、物理現象において座標 q^i は作用 $S[q^i]$ が最小となるような経路が選ばれる.

言いかえると、時間 t_1 から t_2 の運動において、 $q^i(t)\mapsto q^i(t)+\delta q^i(t)$ (ただし両端固定 $\delta q^i(t_1)=\delta q^i(t_2)=0$)なる経路の微小変換に対し、作用が停留値を取る:

$$\delta S[q^i] \equiv S[q^i + \delta q^i] - S[q^i] = 0.$$

この古典的原理を最小作用の原理という.

 a 正しくは $S[q^1(t),\dots,q^D(t)]$ と書かれるべきであるが、配位空間に関する任意の列 $\{a^1,\dots,a^D\}$ は単に a^i と書かれることが多い、この添字 i は添字集合 $\{a^i\}_{i=1}^D$ 程度の意味であり、あまり気にしてはいけない、

系に対し適当な作用 $S[q^i]$, あるいは次節の Lagrangian を決定するのが, 物理学の本質と言えよう.

0.1.1 例: 自由一次元一粒子系

質量 m の自由一次元一粒子系の作用は

$$S[q] = \frac{m}{2} \frac{(q(t_2) - q(t_1))^2}{t_2 - t_1}$$

である.

0.1.2 例: 調和振動子

質量 m, 角振動数 ω の調和振動子の作用は

$$S[q] = \frac{m\omega}{2\sin\omega(t_2 - t_1)} \left[(q(t_1)^2 + q(t_2)^2)\cos\omega(t_2 - t_1) - 2q(t_1)q(t_2) \right]$$

^{*1} ここでの「粒子系」は「(一般的な意味での)場でない」程度の意味である. 厳密には粒子系も時間 \mathbb{R} から配位空間 \mathbb{R}^D への場 $q=(q^i):\mathbb{R}\to\mathbb{R}^D$ であるから, 場の理論の特別な場合とも言える.

である. 上の例とあわせて、これらが $\delta S[q^i] = 0$ を満たすことは明らかである.

0.2 Euler-Lagrange の運動方程式

系の作用を直接求めることは難しく、これから定義する Lagrangian を用いるのが便利である.

作用は、座標と時間に関する Lagrangian $L(q^i, \dot{q}^i, t)$ を用いて、

$$S[q^i] = \int_{t_1}^{t_2} dt \, L(q^i, \dot{q}^i, t).$$

と表される.

最小作用の原理に対し、この Lagrangian が満たすべき条件を求めよう. $q^i\mapsto q^i+\delta q^i$ の変換に対し、作用の変化 $\delta S[q^i]=S[q^i+\delta q^i]-S[q^i]$ を計算すると、

$$\begin{split} \delta S[q^i] &= \int_{t_1}^{t_2} \mathrm{d}t \left[L \bigg(q^i + \delta q^i, \dot{q}^i + \frac{\mathrm{d}\delta q^i}{\mathrm{d}t}, t \bigg) - L(q^i, \dot{q}^i, t) \right] \\ &= \int_{t_1}^{t_2} \mathrm{d}t \left[\delta q^i \frac{\partial L}{\partial q^i} + \frac{\mathrm{d}\delta q^i}{\mathrm{d}t} \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \right] \\ &= \int_{t_1}^{t_2} \mathrm{d}t \left[\delta q^i \frac{\partial L}{\partial q^i} - \delta q^i \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \bigg(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \bigg) + \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \bigg(\delta q^i \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \bigg) \right] \\ &= \int_{t_1}^{t_2} \mathrm{d}t \, \delta q^i \bigg[\frac{\partial L}{\partial q^i} - \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \bigg(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \bigg) \bigg] + \bigg[\delta q^i \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \bigg]_{t=t_1}^{t=t_2} \end{split}$$

となる. ここで、第2項は両端固定の境界条件 $\delta q^i(t_1) = \delta q^i(t_2) = 0$ より消すことができて、

$$\delta S[q^{i}] = \int_{t_{1}}^{t_{2}} dt \, \delta q^{i} \left[\frac{\partial L}{\partial q^{i}} - \frac{d}{dt} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}^{i}} \right) \right]$$

となる. $\delta q^i(t)$ は $t_1 < t < t_2$ で任意だから, 原理 $\delta S[q^i] = 0$ より, 次の運動方程式が得られる.

最小作用の原理を満たすとき、Lagrangian $L(q^i,\dot{q}^i,t)$ は Euler-Lagrange の運動方程式

$$\frac{\partial L}{\partial q^i} - \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \right) = 0$$

を満たす.

これにより、変分条件 $\delta S[q^i]=0$ を満たす $q^i(t)$ を求める問題は、Euler–Lagrange 方程式という 微分方程式を解く問題と等価であることがわかった.

ところで、Lagrangian は一意ではない。 Lagrangian $L(q,\dot{q},t)$ に対し、位置と時間の関数 f(q,t) の時間に関する完全微分 $\mathrm{d}f(q,t)/\mathrm{d}t$ を加えた量

$$\begin{split} \tilde{L}(q,\dot{q},t) &:= L(q,\dot{q},t) + \frac{\mathrm{d}f(q,t)}{\mathrm{d}t} \\ &= L(q,\dot{q},t) + \dot{q}^j \frac{\partial f(q,t)}{\partial q^j} + \frac{\partial f(q,t)}{\partial t} \end{split}$$

は同じ形の Euler-Lagrange の運動方程式を与える. 実際、

$$\begin{split} \frac{\partial \tilde{L}}{\partial q^i} &= \frac{\partial L}{\partial q^i} + \dot{q}^j \frac{\partial^2 f}{\partial q^i \partial q^j} + \frac{\partial^2 f}{\partial q^i \partial t}, \\ \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left(\frac{\partial \tilde{L}}{\partial \dot{q}^i} \right) &= \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} + \frac{\partial f}{\partial q^i} \right) = \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \right) + \dot{q}^j \frac{\partial^2 f}{\partial q^j \partial q^i} + \frac{\partial^2 f}{\partial t \partial q^i} \end{split}$$

であるから, 辺々引いて,

$$\frac{\partial \tilde{L}}{\partial q^i} - \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left(\frac{\partial \tilde{L}}{\partial \dot{q}^i} \right) = \frac{\partial L}{\partial q^i} - \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \right)$$

となり, L について Euler-Lagrange 方程式が成立するなら, \tilde{L} についても成立する.

0.2.1 例: 一次元一粒子系

一次元一粒子系の Lagrangian は

$$L(q, \dot{q}, t) = \frac{1}{2}m\dot{q}^2 - V(q)$$

で与えられる. ただし V(q) は系のポテンシャルである. ここで,

$$\frac{\partial L}{\partial q} = -\frac{\partial V}{\partial q}, \quad \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}} \right) = \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} = m\ddot{q}$$

であるから、Euler-Lagrange の運動方程式は、

$$m\ddot{q} + \frac{\partial V}{\partial q} = 0$$

と求まる. これは Newton の運動方程式として知られており, Lagrangian 決定の任意性を除けば, 最小作用の原理は物理原理として well-defined であることがわかる.

ポテンシャルが無い (V=0) ときの作用の表式を求める. 運動方程式 $m\ddot{q}=0$ を解いて,

$$\dot{q}(t) = \frac{q(t_2) - q(t_1)}{t_2 - t_1}$$

が得られる. したがって, 作用は

$$S[q] = \int_{t_1}^{t_2} dt \, \frac{m}{2} \frac{(q(t_2) - q(t_1))^2}{(t_1 - t_2)^2} = \frac{m}{2} \frac{(q(t_2) - q(t_1))^2}{t_2 - t_1}$$

と求まる.

0.2.2 例: 調和振動子

調和振動子の Lagrangian は,

$$L(q, \dot{q}, t) = \frac{1}{2}m\dot{q}^2 - \frac{1}{2}m\omega^2q^2.$$

で与えられる. ここで,

$$\frac{\partial L}{\partial q} = -m\omega^2 q, \quad \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} \bigg(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}} \bigg) = \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} = m \ddot{q}$$

であるから、Euler-Lagrange の運動方程式は

$$m\ddot{q} + m\omega^2 q = 0$$

と求まる.

作用の表式を求める. 運動方程式を解いて,

$$q(t) = \frac{q_1 \sin \omega(t - t_2) - q_2 \sin \omega(t - t_1)}{\sin \omega(t_1 - t_2)},$$
$$\dot{q}(t) = \omega \frac{q_1 \cos \omega(t - t_2) - q_2 \cos \omega(t - t_1)}{\sin \omega(t_1 - t_2)}$$

が得られる. ただし, $q_1 \equiv q(t_1)$, $q_2 \equiv q(t_2)$ とした. したがって, 作用は

$$S[q] = \int_{t_1}^{t_2} dt \, \frac{m}{2} \left[\left\{ \omega \frac{q_1 \cos \omega (t - t_2) - q_2 \cos \omega (t - t_1)}{\sin \omega (t_1 - t_2)} \right\}^2 - \omega^2 \left\{ \frac{q_1 \sin \omega (t - t_2) - q_2 \sin \omega (t - t_1)}{\sin \omega (t_1 - t_2)} \right\}^2 \right]$$

$$= \int_{t_1}^{t_2} dt \, \frac{m\omega^2}{2} \frac{q_1^2 \cos 2\omega (t - t_2) + q_2^2 \cos 2\omega (t - t_1) - 2q_1 q_2 \cos(2t - t_1 - t_2)}{\sin^2 \omega (t_2 - t_1)}$$

$$= \frac{m\omega}{2 \sin \omega (t_2 - t_1)} \left[(q_1^2 + q_2^2) \cos \omega (t_2 - t_1) - 2q_1 q_2 \right]$$

と求まる.

0.3 Noether の定理

Lagrangian は運動方程式を与えるだけでなく、系の対称性に関する情報も持っている. 時間と座標の連続変換に対し作用が不変であるとき、系には対応する不変量が存在することが知られている. この定理は Noether の定理と呼ばれている.

時間の微小変換 $t\mapsto t'=t+\delta t$ に対し、座標が $q^i(t)\mapsto q'^i(t')=q^i(t)+\delta q^i(t)$ と変換されるとする. このとき $t_1< t< t_2$ の作用の変化 $\delta S[q^i(t)]=S[q'^i(t')]-S[q^i(t)]$ を計算すると、

となる. ここで, 最後の式の第一項は Euler–Lagrange の運動方程式より消え, 第二項の t_1 , t_2 は任意である*2. したがって, この変換に対し作用が不変 $\delta S=0$ であるとすると, 対応する保存量が得られる.

時間の微小変換 $t\mapsto t'=t+\delta t$ に対し、座標が $q^i(t)\mapsto q'^i(t')=q^i(t)+\delta q^i(t)$ と変換されるとき、作用が不変であるならば、量

$$\delta Q \equiv \delta q^i p_i - \delta t H \equiv \delta q^i \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} - \delta t \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \dot{q}^i - L \right)$$

は保存する(Noether の定理 Noether's theorem):

$$\frac{\mathrm{d}\delta Q}{\mathrm{d}t} = 0, \quad (\Leftrightarrow \delta Q = \text{const.})$$

ここで、量

$$p_i \equiv \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i}, \quad H \equiv \dot{q}^i \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} - L = \dot{q}^i p_i - L$$

はそれぞれ一般化運動量, Hamiltonian と呼ばれる(後述).

0.3.1 例:空間並進に対する不変量

空間並進 $t\mapsto t'=t, q^i(t)\mapsto q'^i(t')=q^i(t)+\varepsilon^i$ に対し、作用が不変であるとき、一般化運動量は保存する:

$$\delta Q = \varepsilon^i p_i = \text{const.}$$
 $\therefore p_i = \text{const.}$

0.3.2 例: 時間並進に対する不変量

時間並進 $t\mapsto t'=t+\varepsilon,\,q^i(t)\mapsto q'^i(t')=q^i(t)$ に対し、作用が不変であるとき、Hamiltonian は保存する:

$$\delta Q = -\varepsilon H = \text{const.}$$
 $\therefore H = \text{const.}$

0.3.3 例: 空間回転に対する不変量

3 次元空間での一粒子を考える. 正規直交座標系 q=x を取り, 空間回転 $t\mapsto t'=t$, $x(t)\mapsto x'(t')=R(\varepsilon)x(t)=x(t)-\varepsilon\times x(t)$ に対し, 作用が不変であるとき, 対応する保存量 L は角運動量と呼ばれる:

$$\delta Q = (-\boldsymbol{\varepsilon} \times \boldsymbol{x}) \cdot \boldsymbol{p} = -\boldsymbol{\varepsilon} \cdot (\boldsymbol{x} \times \boldsymbol{p}) = \text{const.}$$

$$\therefore \boldsymbol{L} \equiv \boldsymbol{x} \times \boldsymbol{p} = \text{const.}$$

0.4 Hamilton-Jacobi 方程式

前節で導入された Hamiltonian は, Lagrangian を Legendre 変換したものであり, 系に関して

 $^{^{*2}}$ 最小作用の原理の場合と違い、このときの δq^i は両端固定でない。そのため、Euler-Lagrange の運動方程式の際に消えた発散項を、今回の場合は消すことができない。

Lagrangian と同程度の情報を持つ. 以降, Hamiltonian の性質について詳しくみていく*3.

Lagrangian L が与えられたとき, q^i に対して

$$p_i \equiv \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i}$$

を一般化運動量, または q^i に共役な運動量 conjugate momentum といい, 一般化座標とそれに共役な運動量の組 (q^i, p_i) を正準変数 canonical variables という.

Lagrangian L と正準変数 (q^i, p_i) が与えられたとき a ,

$$H(q^i, p_i, t) \equiv \dot{q}^i p_i - L$$

を Hamiltonian という.

 a たとえば $p_i=\partial L(q^i,\dot{q}^i,t)/\partial \dot{q}^i$ を逆に解いて $p_i=\dot{q}_i=(q_i,p_i,t)$ が得られたとき.

一般化運動量と Hamiltonian は作用を端点で偏微分して

$$p_i(t) = \frac{\partial S}{\partial q^i(t)}, \quad H(q^i, p_i, t) = -\frac{\partial S}{\partial t}$$

と得ることもできる. ただし作用は $S[q^i]=\int_{t_0}^t {\rm d}t'\,L(q^i,\dot q^i,t')$ で与えられている. 実際, Norther の定理と同じ状況での変分は

$$\delta S[q^i] = \left[\delta q^i p_i - \delta t H\right]_{t'=t_0}^{t'=t}$$

である. このときの始点での変位を $\delta t(t_0) = \delta q^i(t_0) = 0$ とすれば,

$$\delta S[q^i] = \delta q^i p_i - \delta t H$$

となる. この変分は経路の始点と途中 $t' \in [t_0,t)$ によらない形になっているから, 一点 t での変位 から求めたい全微分

$$dS = dq^i p_i - dt H$$

が得られる.

これらの性質を組み合わせることで以下の方程式が得られる.

最小作用の原理を満たす作用 $S[q^i] = \int_{t_0}^t \mathrm{d}t' \, L(q^i,\dot{q}^i,t')$ に対し、作用の端点 $t,\,q(t)$ での偏微分は **Hamilton–Jacobi** 方程式 Hamilton–Jacobi equation

$$H\left(q^{i}(t), \frac{\partial S}{\partial q^{i}(t)}, t\right) + \frac{\partial S}{\partial t} = 0.$$

を満たす.

^{*3} Lagrangian を用いた議論を「Lagrange 形式」, Hamiltonian を用いた議論を「Hamilton 形式」と呼ぶことがある.

0.5 Hamilton の運動方程式

Lagrangian の場合と同様に、最小作用の原理に対し Hamiltonian が満たす条件を求めよう. Hamiltonian $H(q^i,p_i,t)\equiv \dot{q}^ip_i-L$ の全微分は、

$$\begin{aligned} \mathrm{d}H &= \dot{q}^i \, \mathrm{d}p_i + p_i \, \mathrm{d}\dot{q}^i - \mathrm{d}L \\ &= \dot{q}^i \, \mathrm{d}p_i + p_i \, \mathrm{d}\dot{q}^i - \frac{\partial L}{\partial q^i} \, \mathrm{d}q^i - p_i \, \mathrm{d}\dot{q}^i - \frac{\partial L}{\partial t} \, \mathrm{d}t \\ &\left(\because \mathrm{d}L = \frac{\partial L}{\partial q^i} \, \mathrm{d}q^i + \frac{\partial L}{\partial \dot{q}^i} \, \mathrm{d}\dot{q}^i + \frac{\partial L}{\partial t} \, \mathrm{d}t \right) \\ &= -\frac{\partial L}{\partial q^i} \, \mathrm{d}q^i + \dot{q}^i \, \mathrm{d}p_i - \frac{\partial L}{\partial t} \, \mathrm{d}t \end{aligned}$$

である. ここで, Euler-Lagrangian 方程式が成立するとき $\dot{p}_i = \partial L/\partial q^i$ であることを用いると, Hamiltonian に関する運動方程式が得られる.

最小作用の原理を満たすとき, Hamiltonian は以下の **Hamilton の運動方程式**あるいは正 準方程式 canonical equation

$$\dot{p}_i = -\frac{\partial H}{\partial q^i}, \quad \dot{q}^i = \frac{\partial H}{\partial p_i}.$$

を満たす.

Lagrangian が時間に陽に依存しないとき, Hamiltonian

$$\frac{\partial H}{\partial t} = -\frac{\partial L}{\partial t} = 0$$

は保存する. 時間並進に対して作用が不変であるから, 前述の Noether の定理の結果とも一致する. $q^i(t)$ と $p_i(t)$ を独立にした作用

$$S[q^{i}, p_{i}] = \int_{t_{1}}^{t_{2}} dt \left[\dot{q}^{i}(t) p_{i}(t) - H(q^{i}(t), p_{i}(t), t) \right]$$

も用いられる. このときの最小作用の原理は

$$\delta S[q^i,p_i] = S[q^i + \delta q^i,p_i + \delta p_i] - S[q^i,p_i] = 0$$

で表される.

0.5.1 例: 一次元一粒子系

一次元一粒子系の Lagrangian は,

$$L(q, \dot{q}, t) = \frac{1}{2}m\dot{q}^2 - V(q)$$

であった.一般化運動量の定義より,

$$p = \frac{\partial L}{\partial \dot{q}} = m\dot{q}$$

である. したがって $\dot{q} = p/m$ であるから, Hamiltonian の定義より,

$$H(q, p, t) = \frac{p}{m}p - L\left(q, \frac{p}{m}, t\right) = \frac{p^2}{2m} + V(q)$$

と求まる. ここで,

$$\frac{\partial H}{\partial q} = \frac{\mathrm{d}V}{\mathrm{d}q}, \quad \frac{\partial H}{\partial p} = \frac{p}{m}$$

であるから、Hamilton の運動方程式は、

$$\dot{p} = -\frac{\mathrm{d}V}{\mathrm{d}q}, \quad \dot{q} = \frac{p}{m}$$

と得られる.

0.5.2 例: 調和振動子

調和振動子の Lagrangian は,

$$L(q, \dot{q}, t) = \frac{1}{2}m\dot{q}^2 - \frac{1}{2}m\omega^2 q^2$$

であった.一般化運動量の定義より,

$$p = \frac{\partial L}{\partial \dot{q}} = m\dot{q}$$

である. したがって $\dot{q}=p/m$ であるから, Hamiltonian の定義より,

$$H(q, p, t) = \frac{p}{m}p - L(q, \frac{p}{m}, t) = \frac{p^2}{2m} + \frac{1}{2}m\omega^2q^2$$

と求まる. ここで,

$$\frac{\partial H}{\partial q} = m\omega^2 q, \quad \frac{\partial H}{\partial p} = \frac{p}{m}$$

であるから、Hamilton の運動方程式は、

$$\dot{p} = -m\omega^2 q, \quad \dot{q} = \frac{p}{m}$$

と得られる.

0.6 正準変換

正準変数の変換 $(q^i, p_i) \mapsto (q'^j, p'_j) = (q'^j(q^i, p_i), p'_j(q^i, p_i))$ に対して Hamiltonian が $H(q^i, p_i, t) \mapsto H'(q'^j, p'_j, t)$ と変換されるとき、この正準変数の変換を正準変換 <u>canonical</u> transformation という. いずれの表示でも最小作用の原理を満たすとき、Hamiltonian の定義から、

$$\delta S[q^i, p_i] = \delta \int dt \, (\dot{q}^i p_i - H) = 0,$$

$$\delta S'[q'^i, p_i'] = \delta \int dt \, (\dot{q}'^i p_i' - H') = 0.$$

したがって、ある関数 W が存在して、

$$(\dot{q}^i p_i - H) - (\dot{q}'^i p'_i - H') = \frac{\mathrm{d}W}{\mathrm{d}t}.$$

$$\therefore \mathrm{d}W = p_i \,\mathrm{d}q^i - p'_{ig} \mathrm{d}q'^i - (H - H') \,\mathrm{d}t.$$

または、両辺に $d(q'^i p_i')/dt$ を足して、

$$(\dot{q}^i p_i - H) - (-q'^i \dot{p}'_i - H') = \frac{\mathrm{d}}{\mathrm{d}t} (W + q'^i p'_i) =: \frac{\mathrm{d}W'}{\mathrm{d}t}.$$

$$\therefore \mathrm{d}W' = p_i \, \mathrm{d}q^i + q'^i \, \mathrm{d}p'_i - (H - H') \, \mathrm{d}t.$$

これら $W(q^i,q'^i,t), W'(q^i,p_i',t)$ をどちらも母関数といい、以下を満たす.

$$p_{i} = \frac{\partial W}{\partial q^{i}}, \quad p'_{i} = -\frac{\partial W}{\partial q'^{i}}, \quad H' = H + \frac{\partial W}{\partial t},$$
$$p_{i} = \frac{\partial W'}{\partial q^{i}}, \quad q'^{i} = \frac{\partial W'}{\partial p'_{i}}, \quad H' = H + \frac{\partial W'}{\partial t}.$$

0.7 Poisson 括弧

正準変数 (q^i, p_i) に対し, **Poisson 括弧** Poisson braket は以下で定義される演算である:

$$\{A, B\}_{\rm P} \equiv \frac{\partial A}{\partial q^i} \frac{\partial B}{\partial p_i} - \frac{\partial B}{\partial q^i} \frac{\partial A}{\partial p_i}.$$

正準変数自身は以下を満たす:

$$\{q^i, p_j\}_{P} = \delta^i_j, \quad \{q^i, q^j\}_{P} = \{p_i, p_j\}_{P} = 0.$$

また、Hamilton の運動方程式は以下のように書き換えられる:

$$\frac{\mathrm{d}q^i}{\mathrm{d}t} = \{q^i, H\}_{\mathrm{P}}, \quad \frac{\mathrm{d}p_i}{\mathrm{d}t} = \{p_i, H\}_{\mathrm{P}}.$$

より一般に、正準変数と時間に関する物理量 $A(q^i,p_i,t)$ について、時間微分に関して以下が成立する:

$$\frac{\mathrm{d}A}{\mathrm{d}t} = \{A, H\}_{\mathrm{P}} + \frac{\partial A}{\partial t}.$$

実際、Aの時間による完全微分は、

$$\begin{split} \frac{\mathrm{d}A}{\mathrm{d}t} &= \frac{\partial A}{\partial q^i} \dot{q}^i + \frac{\partial A}{\partial p_i} \dot{p}_i + \frac{\partial A}{\partial t} \\ &= \frac{\partial A}{\partial q^i} \frac{\partial H}{\partial p_i} - \frac{\partial A}{\partial p_i} \frac{\partial H}{\partial q^i} + \frac{\partial A}{\partial t} \\ &= \{A, H\}_\mathrm{P} + \frac{\partial A}{\partial t}. \end{split}$$

この式は、物理量 A の全時間発展が Hamiltonian H によって記述されることを意味している.

0.8 参考文献

- ランダウ, L., リフシッツ, E. 『力学』 (広重徹, 水戸巌訳, 東京図書, 2008)
- 井田大輔『現代解析力学入門』 (朝倉書店, 2020)
- 高橋康, 柏太郎『量子場を学ぶための場の解析力学入門増補第2版』 (講談社サイエンティフィク, 2005)
- 柏太郎『新版演習場の量子論』 (サイエンス社, 2006)